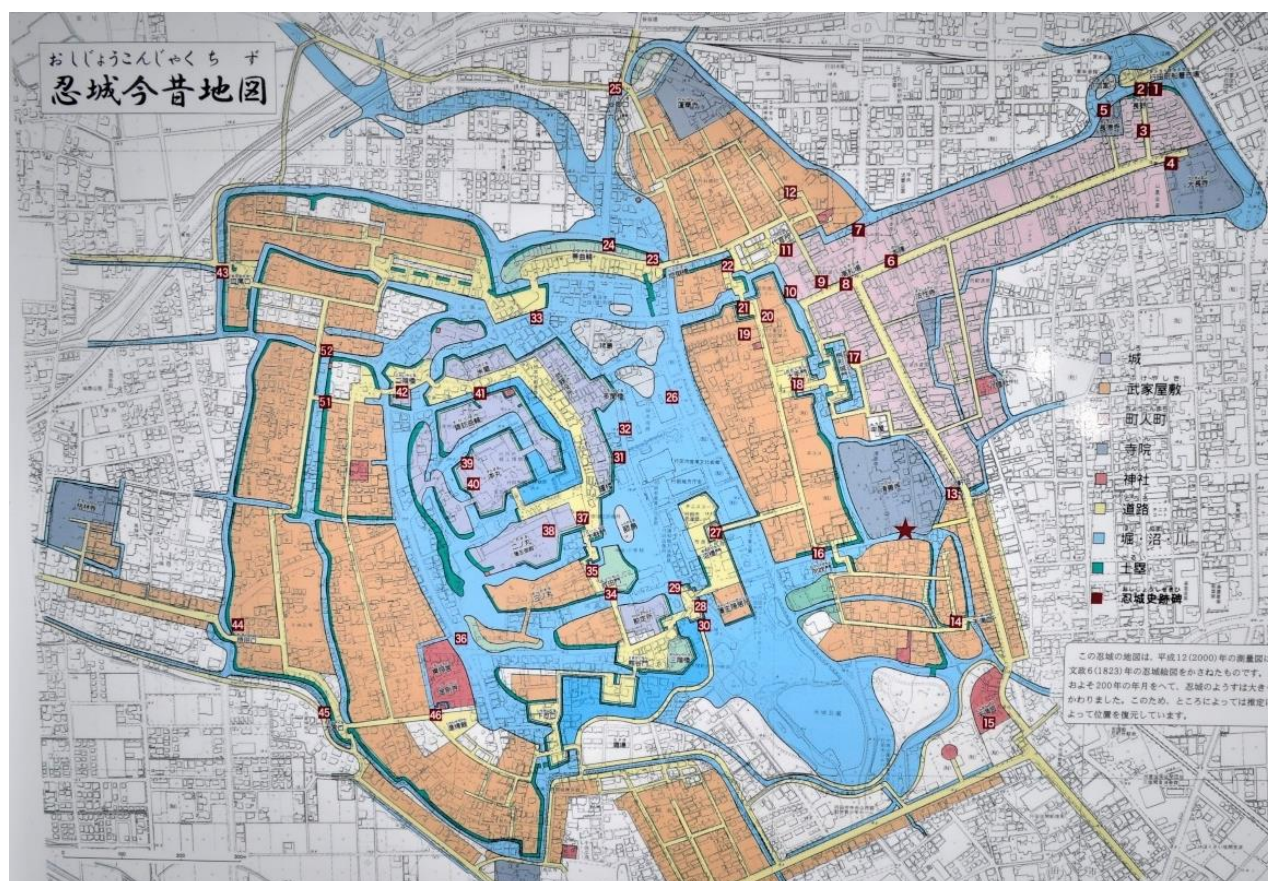


步行距離 約 7 k m

コース J R行田駅（西循環コース左廻りバス）9：45→9：04行田市バスターミナル10：06
～枳形城門跡～大手門跡～本丸堀～太鼓門跡～成田門跡～三階櫓～東門～鐘楼～行田市郷土資料館
（御三階櫓）～昼食かねつき堂～忍東照宮・忍諏訪神社・多度社・一目蓮社～二の丸稲荷社～鳥居強
右衛門居宅跡～愛宕神社～代官所跡～代官町代官屋敷跡～忍宿高札場跡～忍宿本陣跡～保泉蔵～十
万石ふくさや（旧山田清兵衛商店の見世蔵）～大長寺～愛宕神社～行田馬車鉄道発着所跡～長野口御
門跡～行田町船着き場跡～横田酒造（株）～13：28東行田駅13：54発

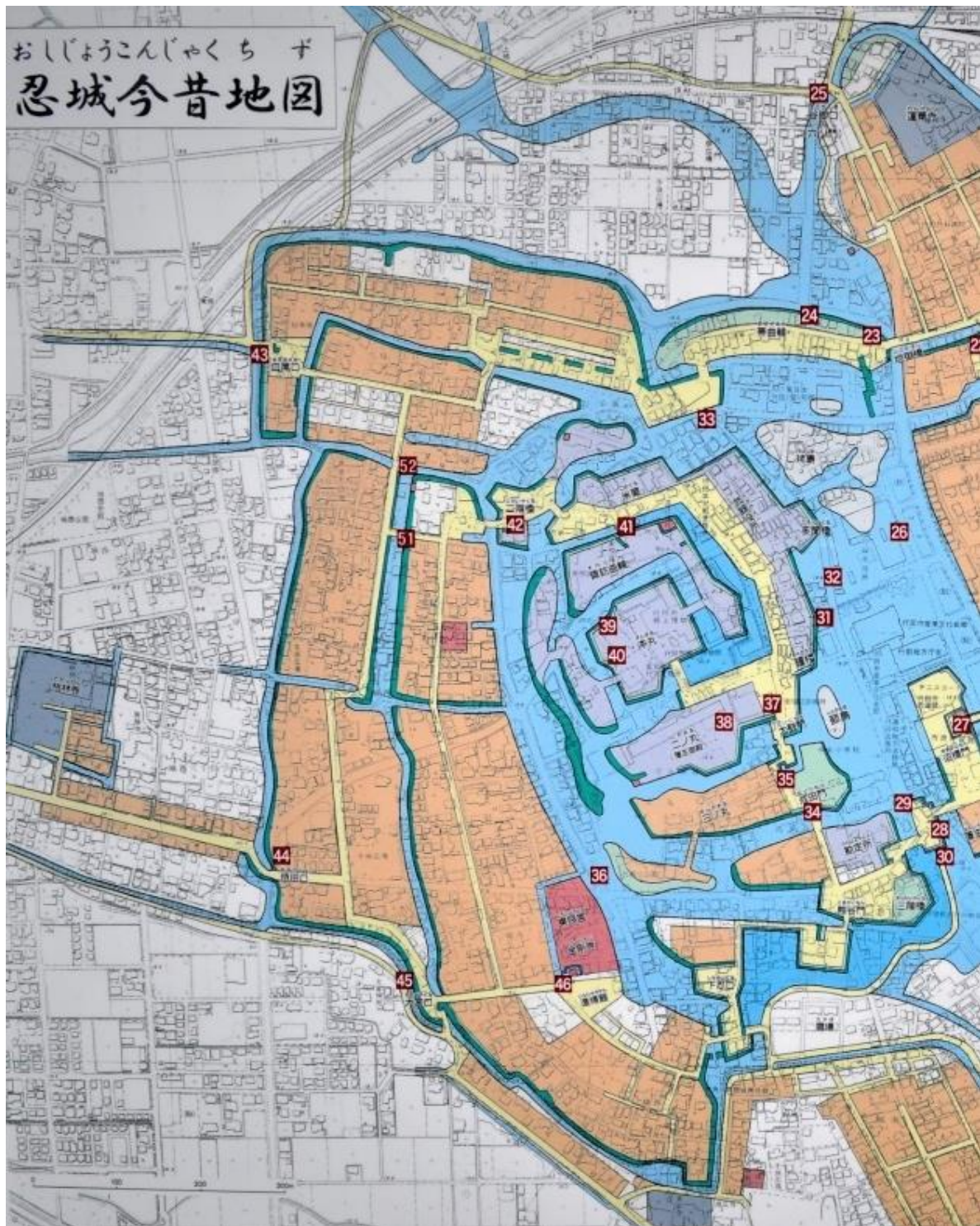


1. 行田町 船着き場跡。2. 忍城十五門の内長野口御門跡。3. 行田馬車鉄道発着場跡。
4. 大露仏跡。5. 長徳寺跡。6. 御本陣跡。7. 蘭法 河津省庵先生診療所跡。8. 高札場跡。
9. 行田学校分教所跡。10. 田山花袋 田舎教師 ゆかりの料亭。11. 代官所跡。
12. 代官町 代官屋敷跡。13. 忍城十五門の内八軒口御門跡。14. 忍城十五門の内天満口御門跡。
15. 佐間学校跡。16. 忍城十五門の内向吹御門跡。17. 忍城大手門外升形城門跡。
18. 大手御門跡。19. 行田兵衛尉館跡。20. 忍警察署跡。21. 忍藩家老鳥居強右衛門居宅跡。

22. 北谷学校跡。23. 地獄橋跡。24. 帯曲輪跡。25. 忍城十五門の内谷郷口六つ門跡。
 26. 忍町尋常高等小学校跡。27. 忍城十五門の内沼橋御門跡。28. 忠義侯忠国侯隠居所跡。
 29. 培根堂洋学館国学館之跡。30. 三重櫓跡。31. 忍の時鐘楼跡。32. 多門櫓跡。
 33. 幕府預り米倉 武器役所跡。34. 勘定所跡。35. 忍城十五門の内成田御門跡。
 36. 忍城三の丸城代家老屋敷跡。37. 忍城十五門の内太鼓門跡。38. 二の丸跡。
39. 忍城御本丸跡。40. 行田電燈株式会社跡。41. 忍城十五門の内諏訪曲輪御門跡。
 42. 二重櫓跡。43. 忍城十五門の内皿尾口御門跡。44. 忍城十五門の内持田口御門跡。
 45. 忍城十五門の内大宮口御門跡。46. 藩校進修館跡。51. 縁切橋跡。52. 涙橋跡。
 47～50は地図範囲外。



1. 行田町 船着き場跡。2. 忍城十五門の内長野口御門跡。3. 行田馬車鉄道発着場跡。
4. 大露仏跡。5. 長徳寺跡。6. 御本陣跡。7. 蘭法 河津省庵先生診療所跡。8. 高札場跡。
9. 行田学校分教所跡。10. 田山花袋 田舎教師 ゆかりの料亭。11. 代官所跡。
12. 代官町 代官屋敷跡。13. 忍城十五門の内八軒口御門跡。14. 忍城十五門の内天満口御門跡。
15. 佐間学校跡。16. 忍城十五門の内向吹御門跡。17. 忍城大手門外升形城門跡。
18. 大手御門跡。19・行田兵衛尉館跡。20・忍警察署跡。21・忍藩家老鳥居強右衛門居宅跡。
22. 北谷学校跡。23. 地獄橋跡。24. 帶曲輪跡。25. 忍城十五門の内谷郷口六つ門跡。
26. 忍町尋常高等小学校跡。27. 忍城十五門の内沼橋御門跡。28. 忠堯侯忠国侯隠居所跡。
29. 培根堂洋学館国学館之跡。30. 三重櫓跡。31. 忍の時鐘楼跡。32. 多門櫓跡。
33. 幕府預り米倉 武器役所跡。34. 勘定所跡。35. 忍城十五門の内成田御門跡。



23. 地獄橋跡。24. 帯曲輪跡。25. 忍城十五門の内谷郷口六つ門跡。
26. 忍町尋常高等小学校跡。27. 忍城十五門の内沼橋御門跡。28. 忠堯侯忠国侯隠居所跡。
29. 培根堂洋学館国学館之跡。30. 三重櫓跡。31. 忍の時鐘楼跡。32. 多門櫓跡。
33. 幕府預り米倉 武器役所跡。34. 勘定所跡。35. 忍城十五門の内成田御門跡。
36. 忍城三の丸城代家老屋敷跡。37. 忍城十五門の内太鼓門跡。38. 二の丸跡。
39. 忍城御本丸跡。40. 行田電燈株式会社跡。41. 忍城十五門の内諏訪曲輪御門跡。
42. 二重櫓跡。43. 忍城十五門の内皿尾口御門跡。44. 忍城十五門の内持田口御門跡。
45. 忍城十五門の内大宮口御門跡。46. 藩校進修館跡。51. 縁切橋跡。52. 涙橋跡。
47～50は地図範囲外。

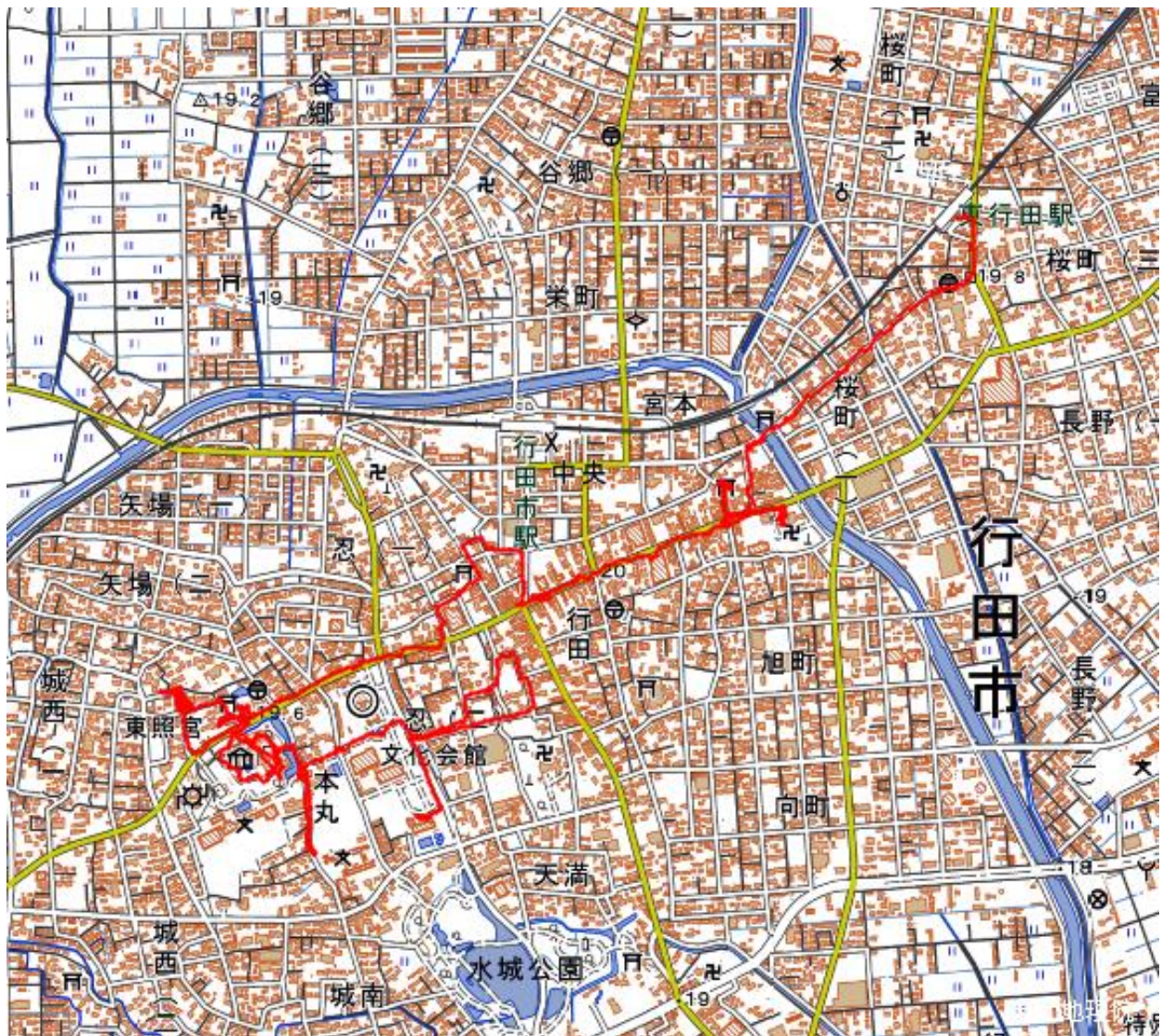
写真は2019（令和元）年9月20日、10月1日、2020（令和2）年10月26日と本日のものを使用。

GPS

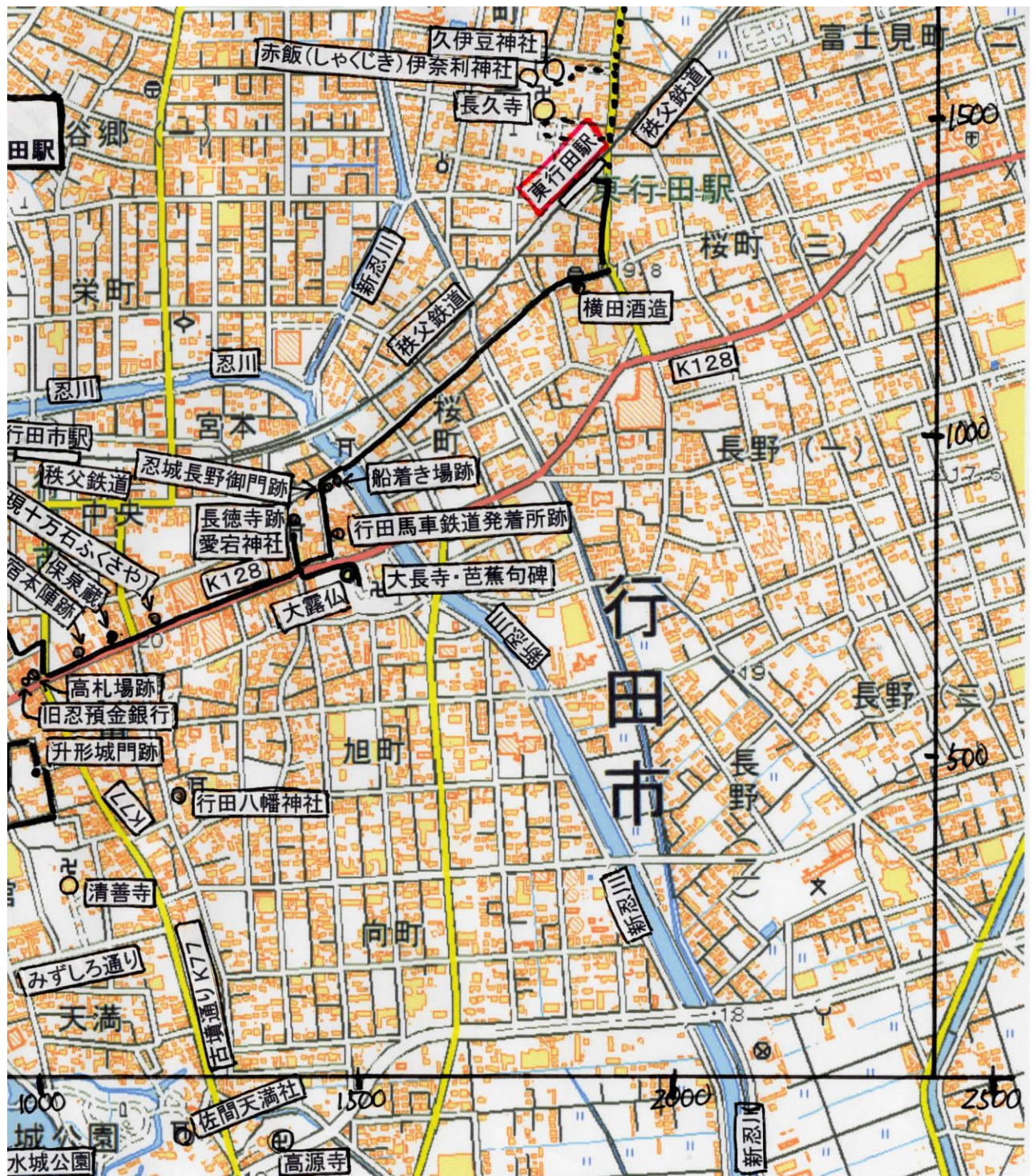
歩行距離：6.4km。 **累計歩行距離 175.2km。**

全体所要時間：3時間22分。移動時間：2時間04分。停止時間：1時間18分。

移動平均速度：3.08km/h。全体平均速度：1.89km/h。



MAP-2 《忍宿本陣跡～東行田駅》



高札場跡 12:39～忍宿本陣跡 12:43～保泉蔵～十万石ふくさや（旧山田清兵衛商店の見世蔵）
 12:47～大長寺・大露佛 12:54～58～愛宕神社（休憩） 13:01～10～行田馬車鉄道発着所跡
 13:12～長野口御門跡 13:14～行田町船着き場跡～横田酒造（株）～13:28 秩父鉄道東行田駅
 東行田駅発 13:54 発の電車で熊谷へ。



行田市バスターミナル『文政地図 27. 忍城十五門の内沼橋御門跡付近』には観光案内所や公衆トイレがある。



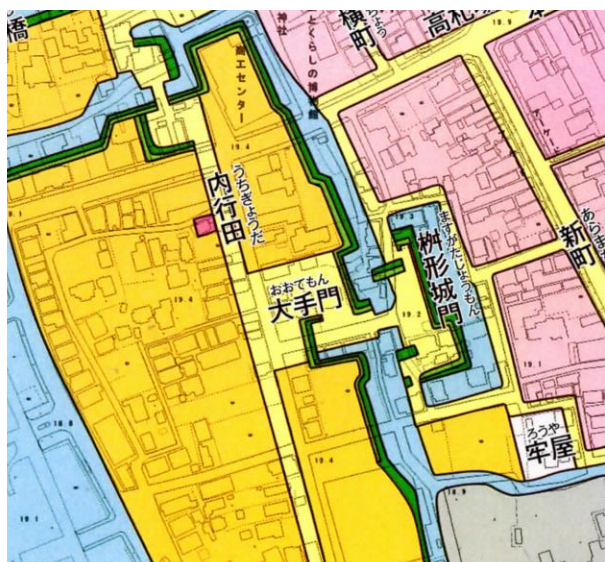
10時06分に出発。東側の公園通りを左折（北行）し、埼玉県行田市地方庁舎の入口道路の先15mの横断歩道で右側に渡り少し戻って左折。230m程の突き当りを左折。70m程の突き当りの左のクラシクの角に「枅形城門跡」石碑がある。（10：17）



枅形城門跡石碑（裏面説明文）『文政6年1823の地図17』

忍四番地一区は忍城大手門外枅形城門地区であり、四ノ二九辺に西向の門（虎口）、四ノ二二辺に南向きの門があり、大手橋を渡り、北の南面の大手門を入り、西に行き、又西面に門があつて内行田通りに出たのである。大手門の守りは固かった。

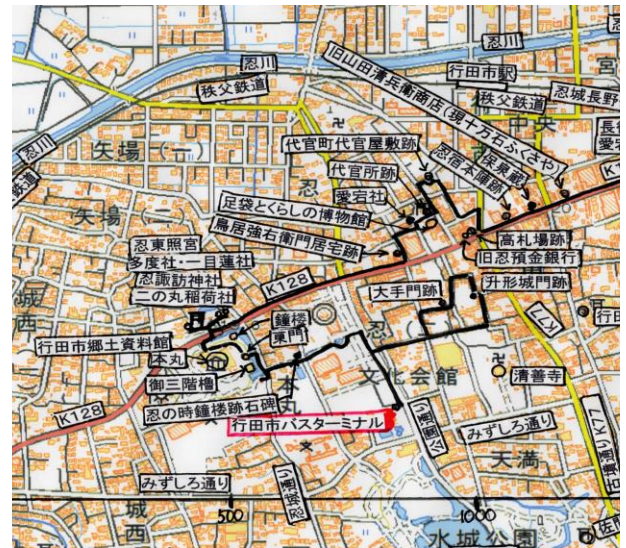
「升形城門跡」石碑の前方・広場の先に「大手門跡」石碑があるので右（北）からぐるっと回る。左折、左折をし、最初の丁字路を右折し15m程の右駐車場の脇に「大手門跡」石碑がある。



忍城大手門跡石碑（裏面説明文）〔文政6年1823の地図18〕

大手門の東は南北二百米 東西五十米の升形門があり 北谷口御門からこの南まで続く石垣の上の白壁の堀 大手橋を渡り此處に南面して立つ大手御門の壮観は老中又は譜代十万石の居城にふさわしい忍城の正門であった。





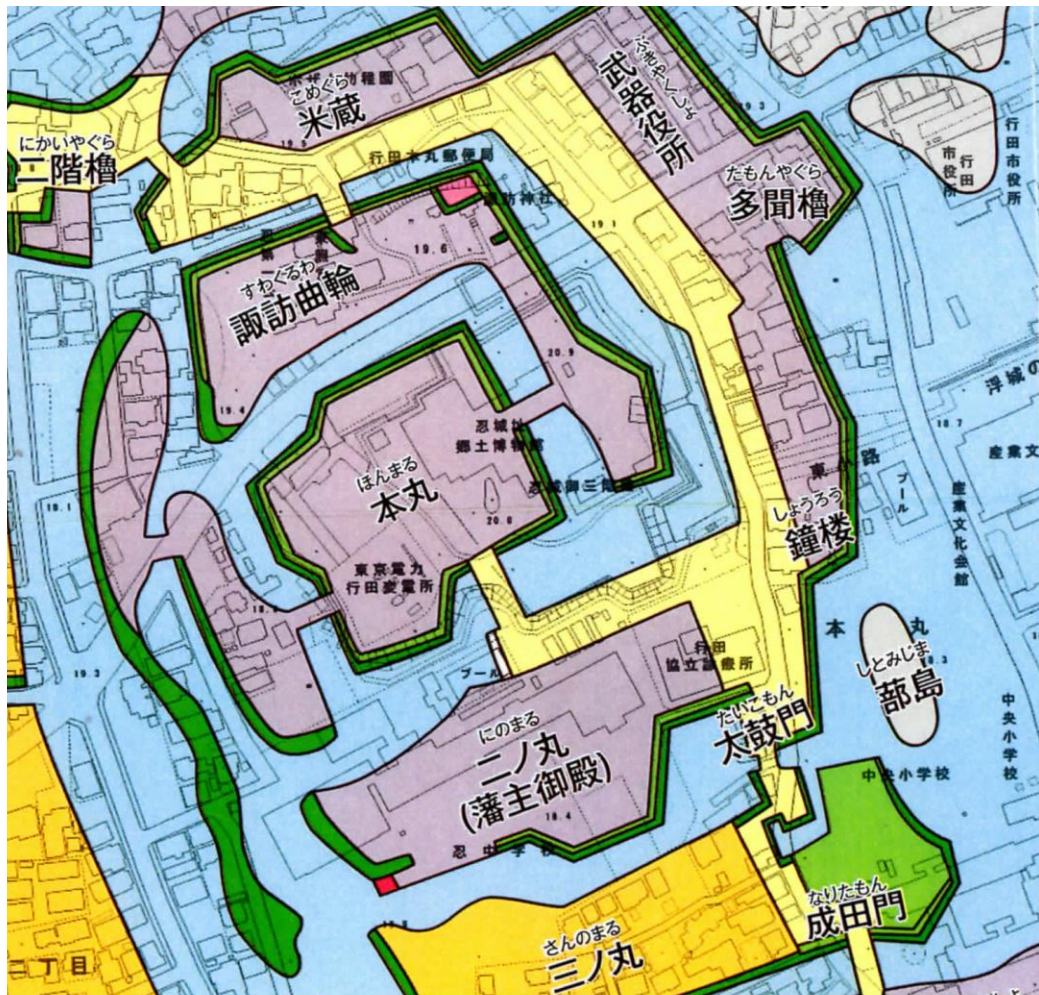
大手門跡から西へ進み、突き当りを左折し、最初の十字路を右折し公園通りに出て渡り、右折。30m程の行田市産業文化会館と市役所の間を左折。「浮き城の径」を「御三階櫓」に向かって進む。途中には観光客に受ける施策がなされていた。



車道を渡ると右手に「忍の時鐘楼跡」石碑があり、前方（西方）に冠木門があるきれいな並木道がある。
（（10：29）冠木は城の風情を増している。



冠木門をくぐって進むと車道（忍城通り）に出る。通りを渡ると目の前に「御三階櫓」がそびえ、堀が巡らされている。（10：31）



忍城通りを左へ進むと80m強の中学校門脇に「太鼓門跡」石碑がある。此所の西側に「二ノ丸（藩主御殿）」があった。（10：33）



太鼓門跡（裏面説明文）

「忍城十五門の内の一番奥（中心部）で藩主居城の二の丸の入口にあった門で 東西数百米めぐらされた白壁の中央に二重櫓の御門があった。この門より西 ほぼ忍中学の校地が二の丸で平屋十数棟が藩主居城として白壁の中に立ち並んでいた」

その先100m程の中央小学校の校門の傍らに「成田門跡」石碑がある。(10:36)



成田御門跡（裏面説明文）

「成田氏の築城した忍城で 一番古い地図からみると この地と本丸が築城当寺のものと思われる
それ故 三の丸入り口を成田門と名付けたものではないか しかし 成田町の地名は明治に入ってからである」

忍城通りを戻り、御三階櫓をバックに写真撮影。



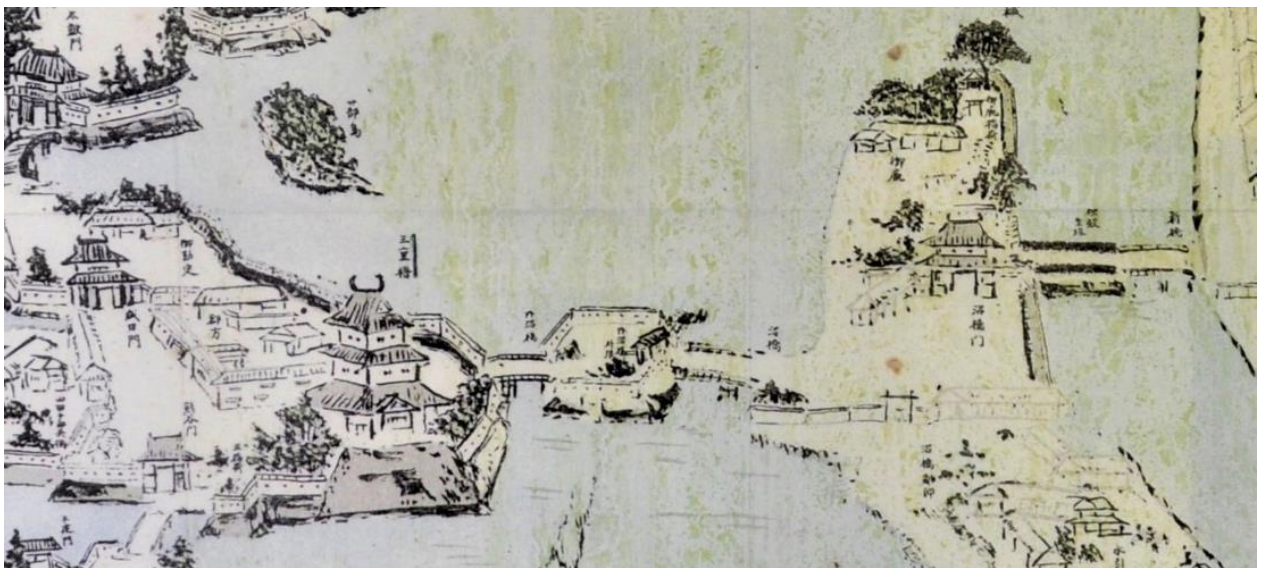


御三階櫓

元は、現在の本丸6-13天理教武行分教所辺りで、忍城の南の外堀の島の南東角に建てられていた。昭和63年（1988）に本丸跡に行田市郷土博物館の開館の一部として鉄筋コンクリート構造によって外観復興された。御三階櫓へは行田市郷土博物館内から行ける。



元の御三階櫓は30の左下。現在の御三階櫓は31の左の堀（空色）を越した所



御三階櫓跡石碑『裏面説明文』

「明治六年 忍城取り壊しの折 上棟札に元禄十三年とあったというから阿部侯三代正能の時代であ

る。白亜の三重櫓であったが老中職にあったので江戸城天守消失のままをはばかり三重櫓と名付けた。松平侯時代は12205冊の書蔵庫であった。」



現御三階櫓は上図「鐘楼」の斜め左。元の御三階櫓は下図中央。

堀に沿って30m程行くと堀に木橋（あずま橋）が架かり、渡った所に「東門」がある。（10：42）





忍城

忍城は、「忍の浮城」と称された、中世戦国大名成田氏の本拠を守る重要な城郭。沖積地に築かれた水城「忍城」は天正十八年(1590)、小田原本城落城後まで戦い抜き、石田三成により水攻めされた城として有名。[\[八王子千人同心日光往還ウォーク参考資料；石田堤\]](#)

忍城は、利根川と荒川に挟まれた沖積地にあり、起伏のほとんどない平坦な地形に立地し、城域は一面湿地帯であった。永正六年(1509)連歌師宗長が成田氏の館に立ち寄ったときの様子を『東路(とうじ)の津途(つと)』に次のように記している。「武州成田下総守顕泰(あきやす)亭にして(略)水郷也、館のめぐり四方沼水幾重ともなく芦の霜がれ二〇余四方へかけて水鳥おほく見え渡りさまなるべし」城地や城下の造成は沼地の掻き上げや埋め立てによって行われたと考えられる。発掘調査で地盤補強材に竹を筏(いかだ)状に組んだものを使用し、法面保護にも使用されていた。

絵図に見られる忍城は四方を沼に囲まれた連郭式の城郭で東側に水堀の中に長方形の出郭を配し、大手門を置いている。掻き上げ道(湿地を掘り上げて土盛りし造った通路)を伝わって三の丸へと連なる部分に徳川家康により褒められたと伝えられる縄張が見られる。(注：当初は本丸には櫓は無く、空き地であった)

城主成田氏は平安時代に武蔵国守藤原基忠を祖とし、その後騎西郡や幡羅郡に勢力を拡張した一族で、熊谷市成田を本拠(注：現・熊谷市上之〈かみの〉に成田氏館跡や成田氏菩提寺龍淵寺がある)としてこの地域を支配し、その後、忍に本拠地を移し、室町・戦国時代を通じて騎西郡域の支配者として君臨した。

忍城は、古河公方足利成氏(しげうじ)が享徳の大乱《享徳三年(1455)に起こり28年間続いた内乱》の最中に別府宗幸に文明十一年(1479)に送った書状によって、成田顕泰が忍城にあってその防備についていたことが知られる。また、成田親保は延徳元年(1489)に忍大丞(だいじょう)の館を襲い一族を滅ぼし、領内を統一し、忍城を延徳三年に完成させたことを示す記録もある。成田氏は、小田原北条氏に付くが、上杉景虎(謙信)関東出陣の折、上杉氏に従属した。しかし、永禄四年(1561)の関東管領就任の席で関東管領上杉輝虎から辱めを受け忍に帰城し、成田氏は再び上杉氏と手切れをし、永禄九年(1566)には小田原北条氏に服した。

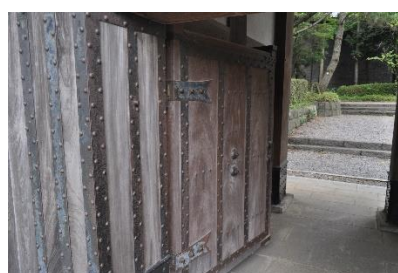
北条氏康は、その成田氏の姿勢を評価し、本領を安堵、成田領として独立させ、北条領国に組み込む

ことはなかった。

成田領の成田氏支配は天正十八年(1590)七月十六日の開城をもって終焉を迎えた。忍城には、江戸時代に入ってから松平忠吉がはいり、寛永十六年(1639)以降は、阿部氏が文政六年(1823)までの184年間にわたって在城した。その後は、松平(奥平)氏が桑名から移封され、幕末まで在城した。



門をくぐると左手に「御三階櫓」が、右手に進むと「鐘楼」がある。



鐘楼





見学後、本丸を見る。当時、本丸には天守や御殿等はなかった。



行田市郷土博物館を出て県道128号線（熊谷羽生線）を少し右方向（東）へ行き、歩道橋を渡ると諏訪神社境内入口で、昔の諏訪曲輪である。

県道を諏訪神社境内に沿って西へ向かい、境内の南西端で右折して進むと境内の北西端の斜め向かいに行田名物B級グルメ・ゼリーフライの店「かねつき堂」がある。ここで昼食。（11：33～12：07）





ゼリーフライ



行田市駅にあった看板

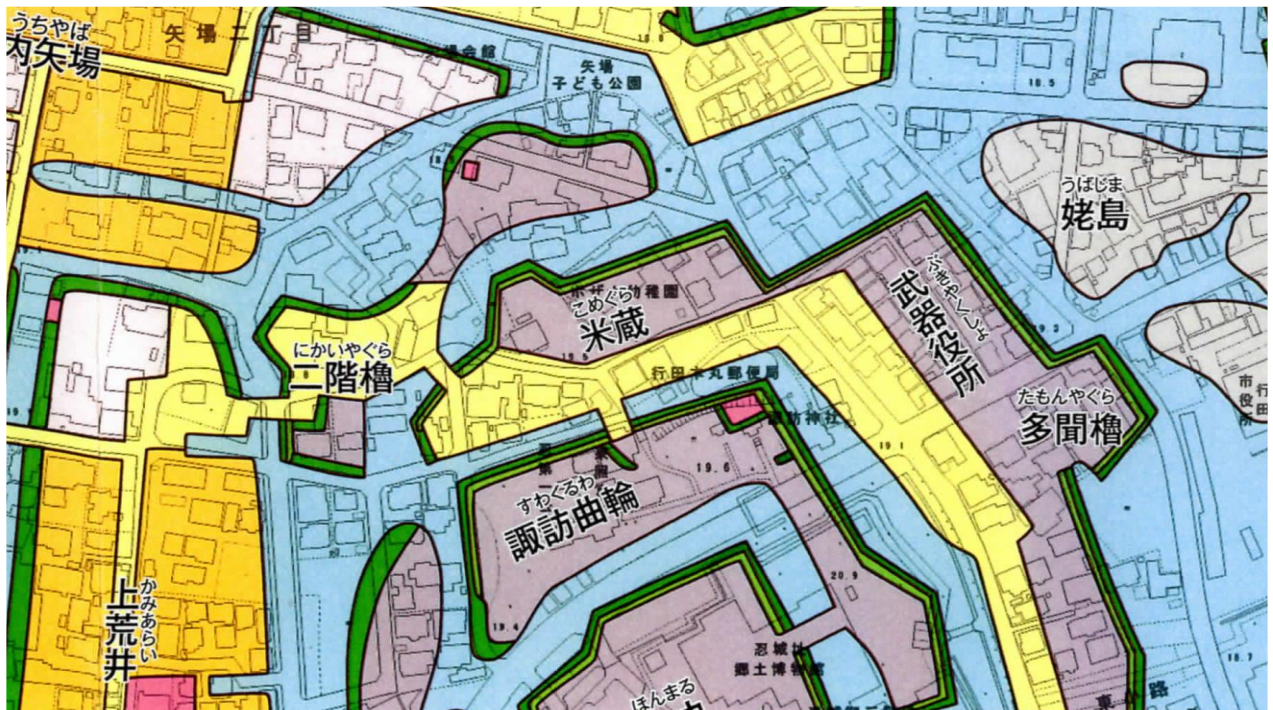


昼食後、「二重櫓跡」石碑を見に行く。(12:09)



二重櫓跡（裏面説明文）

「忍城北西の見張りとして立派な二重櫓を築く 矢場の武家屋敷より外堀越しに見る二重櫓は南の三階櫓 今の常磐通りより見る多聞櫓と三つの白壁の櫓は忍城の景観であったという」



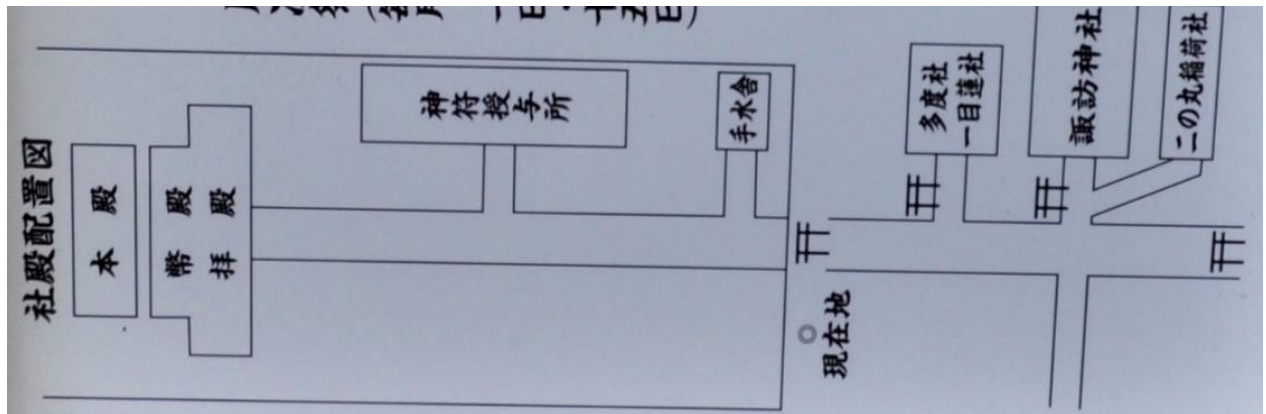
その後、「諏訪曲輪御門跡」石碑を見て諏訪曲輪に入り（12：13）、「忍東照宮」「多度社・一目蓮社」「忍諏訪神社」「二の丸稲荷社」をお詣りし、諏訪曲輪から県道に出る。（12：21）
「諏訪曲輪御門跡」



諏訪曲輪御門跡（裏面説明文）

「本丸の北東を包む一大曲輪の北口として諏訪曲輪は 更に北東を囲む多聞曲輪への出入口として軍事上重要な御門であった」

諏訪曲輪御門『文政6年1823の地図41』から諏訪曲輪に入り、右の鳥居を潜ると「忍東照宮」拝殿・幣殿・本殿がある。戻ってくると左手に「多度社」・「一目蓮社」、「諏訪神社」、「二の丸稲荷社」と並んで祀られている。

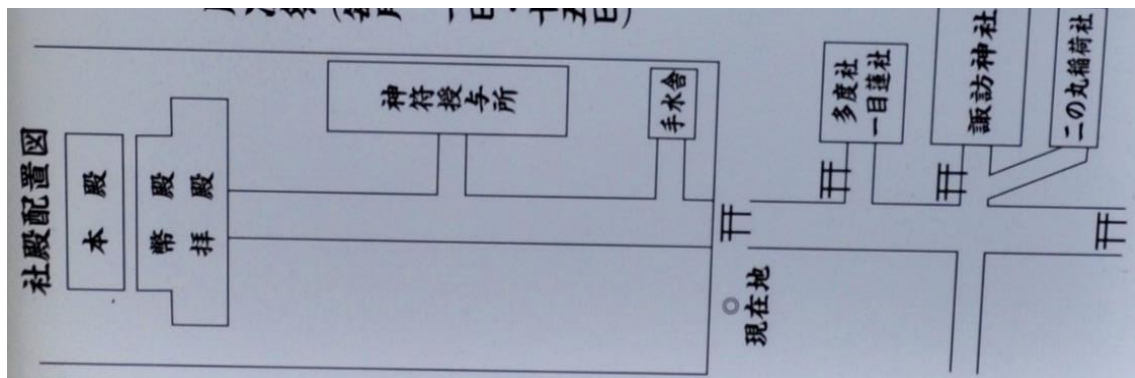


[illegible]

☞ 下荒井 東照宮

御祭神 徳川家康命・松平忠明命 八幡大神

公に伝え、忠明公が寛永二年（1625）、大和国郡山城内に社殿を造営して、肖像を安置したことに始まる。以来、藩主・藩士崇敬の社となった。その後、移封の都度遷座され、慶應四年（1868）、鳥羽・伏見の戦いの折、大阪蔵屋敷内の東照宮を当社に合祀した。社領は、郡山当時より百石を受け継ぎ、明治維新まで続く。その地はさきたま古墳群の辺りであったと伝えられている。



忍諏訪神社

御祭神 建御名方命・八坂刀売命

当社の鎮座したのは、八十二代後鳥羽天皇の建久（1190年頃）の昔、忍三郎・忍五郎家時等の一族が、館・墨等を築き居住した頃と伝えられている。又「持田村誌」には、成田親泰が延徳三年（1491）に忍城を構築し、この時、持田村鎮守諏訪社を城鎮守としたのが、当社であると伝えている。その後、成田氏代々の崇敬があり、寛永十六年（1639）、城主となった阿部忠秋は城郭を修築し、併せて正保二年（1645）、当社の本殿を造営、寛文十二年（1672）拝殿を新たに建立した。現在の社殿は、昭和三十六年の造営である。

文政六年（1823）、松平忠堯（ただたか）は伊勢桑名から移封するに当り、城内字荒井の地へ東照宮を、更に城内へ多度社と一目蓮社を勧請した。これらは明治六年、城郭取り壊しの際、当社境内に移される。又、城内各所にあった小祠、科斗社（しなどしや）・八幡社・久伊豆社・荒神社・春道稲荷大明神・神明社・二の丸稲荷大神・天神社・両棟稲荷大明神の九社も、同時に当社へ配祀された。



多度社・一目蓮社



多度社・一目蓮社

御祭神 天津彦根神 天目一固神（あめのまひとつねのかみ）

現在の場所より西北に200m程の所に文政六年（1823）、松平忠堯（ただたか）は伊勢国多度山より城内に勧請。当時の境内は三百坪程あり、例祭（五月五日）には神楽殿で「能」が演じられたという。

忍藩は忍宝正（ほうしょう）の名があり、宝正流の能が盛んだった。

明治六年、現在地に遷座。

折雨や海上の風難、水火の災いに靈驗あるとされる。

中島注

本宮 多度大社の祭神は天津彦根神。天照大神の第3皇子である。創建は、社伝では雄略天皇の御代と伝わる。古代には、社殿背後の多度山を神体山としていた。

境内には天津彦根神の子である**天目一箇命**を祀る別宮・**一目連神社**がある。

前回（第17回）のウォークガイドに記述した。

一目連大神（いちもくれんおおかみ、ひとめむらじのおおかみ）

一目連大神の祭神は、「**天目一箇神**（あめのまひとつのかみ）」で、天照大神の第3皇子である天津彦根命の御子神。（祭神として天津彦根命を祀った多度大社本宮の隣にある別宮一目連神社には天目一箇神が祀られている）

この神は片目で『日本書紀』では作金者（かなだくみ）として、大国主命に奉仕したり、天照大神の岩戸隠れのときには刀や斧を造って奉じた神である。代々鍛冶を職務としたもので、古来金工や鍛冶の信仰を集めた。一方で鍛冶には水、火、風が必要で、天目一箇神はそれらの支配神とも考えられ、父神である天津彦根命と共に、天候を司る神と仰がれた。

ここの「**一目蓮社**」は「蓮」で、多度大社の「**一目連神社**」は「連」で、又、祭神「天目一**固**神」は「固」で、古事記、日本書紀では「天目一箇神」及び多度大社は「箇」である。

二の丸稲荷神社

御祭神は、宇賀御霊神で、忍城二の丸に祀ってあったものを明治6年（1873）に諏訪神社境内に遷座したもの。一説には永禄年間（1560年頃）忍城主成田長泰が見返曲輪内に若い時に殺生した狐の親子を祀ったものとも言われている。



忍諏訪神社から県道128号線熊谷羽生線を東に行き、歩道橋がある「行田市役所入口交差点」を直進。次の行田市商工センターがある信号交差点を左折し、15・6mの左、植え込みの中に「鳥居強右衛門居宅跡」の碑がある。（12：29）



鳥居強右衛門居宅跡 行田市教育委員会

天正三年（1575）七月十六日三河長篠城救援の軍使として大任を果たし礫死した鳥居強右衛門の十二代商近（あきちか）は松平藩家老五百石としてここを忍の居宅とした。十三代商次が維新の官軍との交渉に家名をあげた。城西桃林寺に六基の墓石あり。

昭和五十四年三月 建立 行田ライオンズクラブ

鳥居強右衛門 大澤俊吉著『行田史跡物語』より

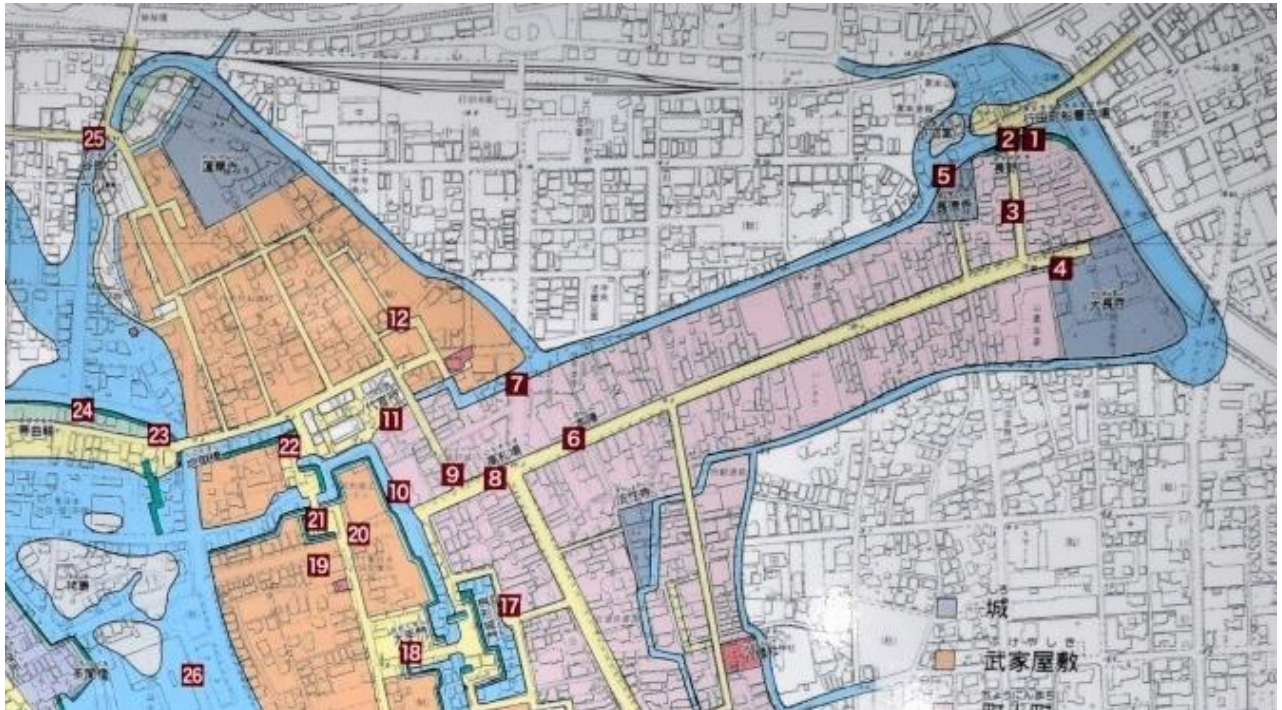
松平下総守の祖は、三河長篠城主として武田勝頼の二万七千の大軍を、わずか五百の少勢で徳川家康の計画通り、信長の援軍の到着まで死守し設楽原の大勝の主因を作った、奥平伸昌と家康の長女亀姫との間に出来た四男忠明を初代とする。

長篠城の武田勝頼と信長・家康連合軍の戦いによって、織田信長の天下統一の道になったわけである。長篠城を死守し最後の機を軍使として、家康に急を報せ、命を賭して大切な情報を伝えた鳥居強右衛門（とりいすねえもん）は軍神として、武士の鑑として語り継がれている。

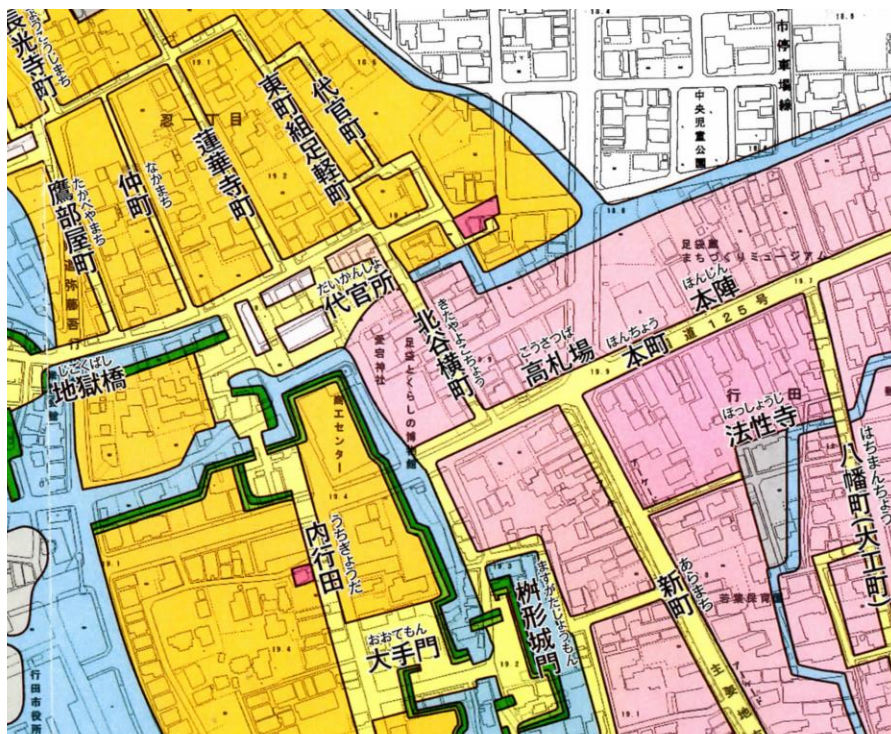
その鳥居強右衛門は礫死したが、その子・信商は士分に取り立てられ、松平家初代忠明侯に仕えて禄

高千石の家老となった。そして代々家老か、御用となって十二代商近の時、桑名から忍に来てこの地を居宅とした。

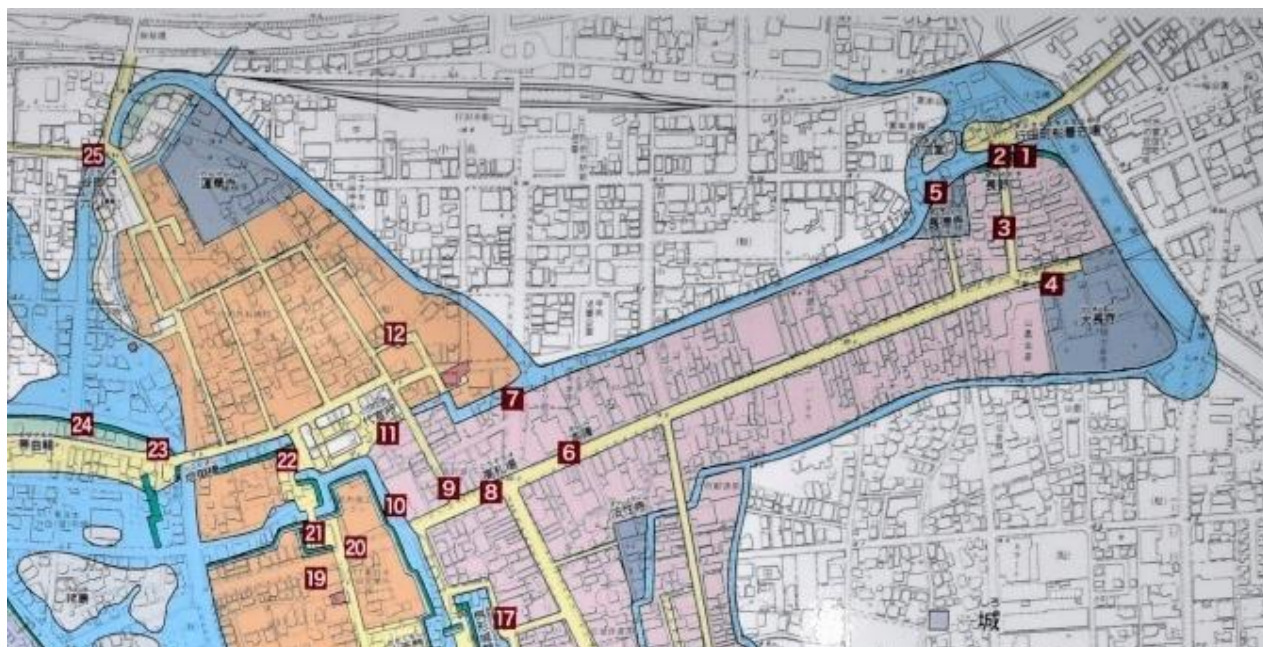
十三代商次は五百石末席家老となり明治維新を迎えた。慶應四年（1868）三月十一日官軍が羽生より進軍し行田町に入り、大砲を地獄橋に据えて軍使五人が大手門より入城し、藩主に勤王の確証を得たいと申し込み、二の丸評定所にて談合することになった。藩主忠誠は立場上佐幕派であったが、先君忠国侯は勤王派で藩論を統一しており、帰順の誓書を差し出すこととなった。誓書に署名のおり、家老五名のうち署名するのは一人との事、万一の事あれば切腹覚悟というわけである。家老はお互いの顔を見合わせたが、強右衛門が進み出て一人署名したという。さすが強右衛門の子孫であると、語り草になったという。



鳥居強右衛門居宅跡は21。代官所跡は11。代官屋敷跡は12。



鳥居強右衛門居宅跡の50m先を右折した奥、突き当たりに愛宕神社があり、その参道入口右側に「代官所跡」の碑がある『文政6年1823の地図11』。(12:33) 忍藩は全国各地に飛地を持っており、それらの領地から年貢の取り立ての仕事を行っていたのが代官所。



代官所跡は[11]。代官屋敷跡は[12]。高札場跡は[8]。本陣跡は[6]。

代官所跡 行田市教育委員会

代官所跡

忍一の五番北東の一角は忍藩秩父山方代官と御蔵役代官の詰所で、山方代官は服部、松岡、野間等十一人 普請御蔵役は藤田 別所等九人であった。

役宅は東町裏にあつて代官町といつていた。代官所は後に奥御医師筆頭岸田宗泉の診療所となった。

昭和五十四年二月

建立 行田ライオンズクラブ

忍藩代官所

忍藩の領地は忍一帯だけでなく、秩父、影森、白久、定峰等の秩父領。皆野、風布等鉢形領。別府、東方の柿木領。遠く播州（兵庫県）に四部七か村、伊勢領（三重県）と各地にあつたので、それらの

支配、年貢取立ては大変であった。帳簿も大変な数で、代官所で整理したという。代官所は領地数百ヶ所の登記所であり、税務署であったといえれば分かりやすいだろう。膨大な行政を下級武士二十人でこなしていたのである。ドラマで見るような代官生活はとても出来そうにない激務であっただろう。

代官所のあった通りを北谷通りというが、古く鎌倉道の時代からあったのではないか。源義家が奥州討伐の時、行田を通ったのはこの道らしく、北条最明寺時頼(1227~63)が、“鉢の木”で有名な佐野源左衛門と出会って、鎌倉へ帰った時の道は白川戸からこの道を通ったらしい。西行法師が平泉の藤原秀衡を訪ねる道すがら埼玉の前玉神社(注：さきたま古墳群の中に鎮座し、神社自体も浅間塚古墳の上に鎮座する)に泊まり、翌日行田を通り、白川戸から利根川を渡ったと様々な文献から推測される。

大澤俊吉著『行田史跡物語』より

愛宕社から北へ70m弱の丁字路を右に入って20m程の突き当りの駐車場の金網の後に「代官町 代官屋敷跡」の碑がある。『文政6年1823の地図12』 (12:35)



代官町 代官屋敷跡 行田市教育委員会

秩父山方、樋普請、御蔵役の御代官屋敷が並んで居ったので、代官町と名づけていた。服部奎右衛門はじめ井上、木口、鈴木、福田、松岡、栗本の各代官の居宅があつて、北谷代官所に詰めていた。 昭和五十四年三月 建立 行田ライオンズクラブ

忍藩 代官

筆頭御代官服部奎右衛門宅が一番南で、井上、木口、鈴木、福田、松岡、栗本と並んで建っていた。御代官といっても十石内外で、役料三石で遠く秩父、伊勢(三重県)、播州(兵庫県)へ出向いたわけで、任務は重かった。忍にあるときは、役宅から北谷の代官所に出向き書類を整理し、それを勘定所に報告し、勘定奉行の指示を受けるわけである。

嘉永七年の忍藩分限帳によると、先の服部奎右衛門を筆頭代官として、二十名の代官で、百数十カ村の年貢事務をしたのである。数名の名主の帳簿だけでも、莫大な帳簿の量であり、百数十の名主を回り、書類と現物の収納一切の事務は、よく二十人位でできたものだと驚くほかはない。ドラマで見る悪徳代官などは、現実には想像もできない重労働であったのだろう。

大澤俊吉著『行田史跡物語』より

駐車場を右にぐるっと回って東へ行き丁字路を右折すると中央通りに出るので右折すると直ぐに
 県道128号線（熊谷羽生線）との交差点に着く。交差点の右角・武蔵野銀行行田支店前に「**忍宿高札場跡**」の碑がある。（12：39）ここから進む県道128号線は千人同心日光往還である。



忍宿高札場跡

上町・仲町を行田町の中心として大整備を完成したのは阿部正允（まさちか）時代（1745～80）である。そして、ここに他所に誇る立派な高札場を設け、忍藩の総ての里程の基点とした。

明治三年高札場は廃止され取り壊された。

昭和五十三年八月

建立 行田ライオンズクラブ

協賛 武蔵野銀行行田支店



交差点を東へ行った60m程の埼玉県信用金庫の前に「御本陣跡」の碑がある。(12:34)この辺りが本陣を務めた樋口太郎三郎家で、明治四年(1871)の大火で立派な本陣建物や東隣の脇本陣共々焼失した。



御本陣跡

代々町年寄の八代樋口太郎三郎が本陣を仰せつかったのは安政四年(1775)、弘化三年(1845)初午の大火後、立派な本陣を造ったが、明治三年(1870)廃止となり、そばや松月庵となったが、明治四年一月十三日出荷し東隣の脇本陣と共に焼失した。

昭和五十三年八月

建立 行田ライオンズクラブ

協賛 埼玉県信用組合行田支店

忍宿本陣

本陣は、寛永十二年(1635)に参勤交代制が確立されて、大名が江戸往還の宿に困り、公的宿泊機関として出来た。街道の本陣は主な宿にしかなかったもので、城下町にも本陣があった。本陣は苗字帯刀を許される格で、八代目樋口太郎三郎家となったのは老中阿部豊後守正允(まさちか)の時代である。

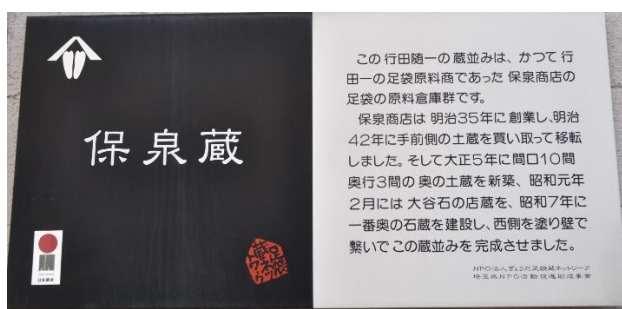
弘化三年(1845)の伝兵衛長屋の大火で焼失すると、立派な本陣が建てられ東隣に脇本陣も出来、行田町の威容を誇った。

明治三年(1870)本陣が廃止となり、松月庵というそば屋になったが、家屋も什器も立派なので“拝みに行った”と語り草になった。明治四年の大火では本陣と脇本陣の出火争いとなり、本陣ということになり、十一代樋口市十郎は行田市を去った。

大澤俊吉著『行田史跡物語』より



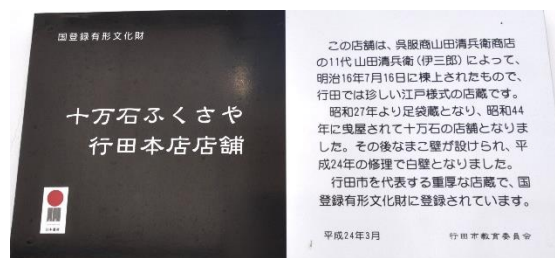
本陣跡から40m程の「LifeSceneますみ」の裏の倉庫群は「保泉蔵」という。



保泉蔵

この行田随一の蔵並みは、かつて行田一の足袋原料商の足袋の原料倉庫群です。保泉商店は明治**35**年に創業し、明治**42**年に手前側の土蔵を買い取って移転しました。そして大正5年に間口**10**間奥行**3**間の奥の土蔵を新築、昭和元年には大谷石の店蔵を、昭和7年に一番奥の石蔵を建設し、西側を塗り壁で繋いでこの蔵並みを完成させました。

更に進んだ左の「十万石ふくさや」として使われている見世蔵は、「旧山田清兵衛商店の見世蔵」で、明治十六年(1833)に呉服商の見世蔵として建てられ、一時足袋蔵として使われた。(12:47)

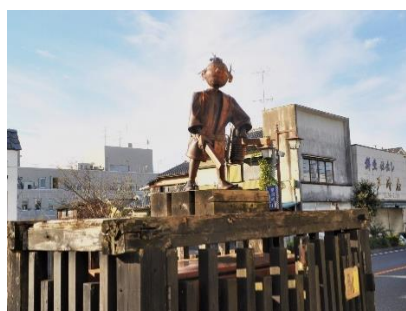


十万石ふくさや行田本店店舗（説明板より）

この店舗は、呉服商山田清兵衛商店の11代山田清兵衛（伊三郎）によって、明治16年7月16日に棟上されたもので、行田では珍しい江戸様式の店蔵です。

昭和27年より足袋蔵となり、昭和44年に曳屋されて十万石の店舗となりました。その後なまこ壁が設けられ、平成24年の修理で白壁となりました。

行田を代表する重厚な店蔵で、国登録有形文化財に登録されています。



ここから350m程の県道を右に渡ったところに大露仏が鎮座する「大長寺」がある。(12:54～58)



大長寺

亀通山行田院大長寺と号し、浄土宗の寺。京都知恩院第29世岌善上人が元亀天正年間に諸国巡行中、当地へ逗留し大長寺を創建した。寛永16年(1639)より文政6年まで忍藩主を勤めた阿部豊後守家の菩提寺となり、享保年間には大仏を寄進されている。(現在の大仏は平成8年に再建されたもの)

境内には「芭蕉の句碑」、「露座の大仏」や「塩地藏」がある。



市指定文化財 大長寺の芭蕉句碑 平成五年二月二十五日指定

この句碑は、元は桜町の小沼の池の付近にあったもので、『忍名所図絵』にも記述がみられます。区画整理の際に、ここに移されたと伝えられています。碑表には「古池や蛙飛こむ水の音 芭蕉翁」と句が刻まれ、碑裏には「多少庵秋瓜謹書」とあります。安永から寛永にかけて江戸で活躍した俳人多少庵秋瓜との関連が伺える句碑です。緑泥岩製で、高さ百七十四センチメートル、幅七十四センチメートル、厚さ五センチメートルです。 平成五年三月 行田市教育委員会

塩盛り地藏尊(説明板より)

自らの御体を塩で清め、私達の苦悩を除き下さる慈しみ深い菩薩様です。特に、昔はイボを治す地藏としてあがめられ、今は、心の闇を照らして救いくださる地藏様として、慕われています。



造立は千六百年頃です。

おまいりの仕方

お地蔵様の塩をたむけ、線香、賽銭等を献じて、願いを込めてお祈りします。

塩地蔵は元国道125号線沿いにありましたが、道路拡張の爲、この地に移りました。
願いが叶ったら、そのお礼に倍の塩を供えるそうです。



大長寺大仏

大長寺には、記憶に新しいものだけでも大涅槃図（本堂保管）、毘沙門堂（日光へ移築）等の、忍藩主阿部氏寄進の貴重な文化遺産があり、とりわけ檀信徒はもとより、広く民心を魅了し慕われたものに、大長寺大仏と称される、壮麗で厳かな露座の大仏（享保年間建立）がありました。ところが、先の大戦で、梵鐘、露座の盧遮那仏数体と共に供出して戻らず、（中略）。

悠揚迫らぬ大仏を、この世の平安の証として遺し、未来永劫にわたって崇めるべく、ゆかりある三百有余の檀信徒の恩情と数多の工匠の尽力に依拠して茲に再建したことを、（中略）

大長寺大仏 身丈 3.6メートル 蓮台 1.2メートル 総高 7.4メートル
重量 6.7トン

平成七年十二月吉日

亀通山行田院大長寺



県道を左に渡り入った所の「長徳寺跡」に「延喜式内社愛宕神社」がある。参拝し休憩をとる。(13 : 01 ~ 10) 境内に「行田西之市起源碑」がある。



愛宕神社の別当は「長徳寺」であった。明治元年の廃寺となった。長徳寺跡の碑は愛宕神社内の西側石垣前にある。



長徳寺跡

長徳寺がいつ頃出来たか不明である。明治元年に廃寺になり愛宕社のみにした。八畳六間の本堂と庫裡二間の長徳寺は、学制頒布により行田町に小学校を造ることになり、明治五年十月十三日に行田学校となり、本町に移るまでの四年間あった。当時、長徳寺に入る路地は門前市で、小料理屋やそば屋などで賑わっていた。明治七年二月、埼玉県に警察出張所が出来たのだが、下町の門前市の入口だったらしい。

明治二十一年に登記所ができて、明治三十八、九年内行田に移る際に長徳寺は取り壊されて、下町から宮本町に抜ける現在の道が出来た。

文政六年(1823)十一月十二日、桑名から国替えになった松平下総守忠堯(ただたか)侯は、忍城に初入城するときに、上町から田山花袋ゆかりの料亭魚七の所を左に折れ、升形門を通り、大手門をくぐり、内行田通りに出て、沼橋御門を抜け、太鼓門から二の丸へ入った。(一説には、長徳寺で行列を整え、下町を通り城に向かったとある)それ以外、二の丸へ行く道はなかったのである。忠堯は上町のお堀端で名主たちと初お目見えをしている。

大澤俊吉著『行田史跡物語』より。

県道に戻り、次の道を左に入る。この道は、旧街道日光往還で、「行田（忍）馬車鉄道道路」でもある。40m程先に「行田馬車鉄道発着所跡」石碑がある。（13：12）



行田馬車鉄道 吹上—行田下町間5.3km。

明治34年（1901）6月に日本鉄道吹上駅から行田を経て長野村に至る馬車鉄道が開通した。創業時は忍馬車鉄道。発起人は忍町（行田市）の橋本甚五郎ら15名で北埼玉郡忍町行田の青縞卸商や足袋製造業者が中心となって設立した。

明治38年（1905）5月、忍馬車鉄道の経営陣は新たに行田馬車鉄道を設立し前会社の事業を引き継いで経営して、その後乗合自動車事業も行う。大正11年（1922）に北武鉄道（後の秩父鉄道秩父本線）の開通によって会社に大きな影響を受けた。大正11年12月には行田—鴻巣間に乗合自動車の営業を開始し、大正12年（1923）馬車鉄道を廃止して乗合自動車専業となる。

道を先（北）に進むと小沼橋通りにぶつかる。その右角に小公園があり、「忍城長野口御門跡」碑と「長野口」解説板と「行田町船着き場跡」碑がある。（13：14）

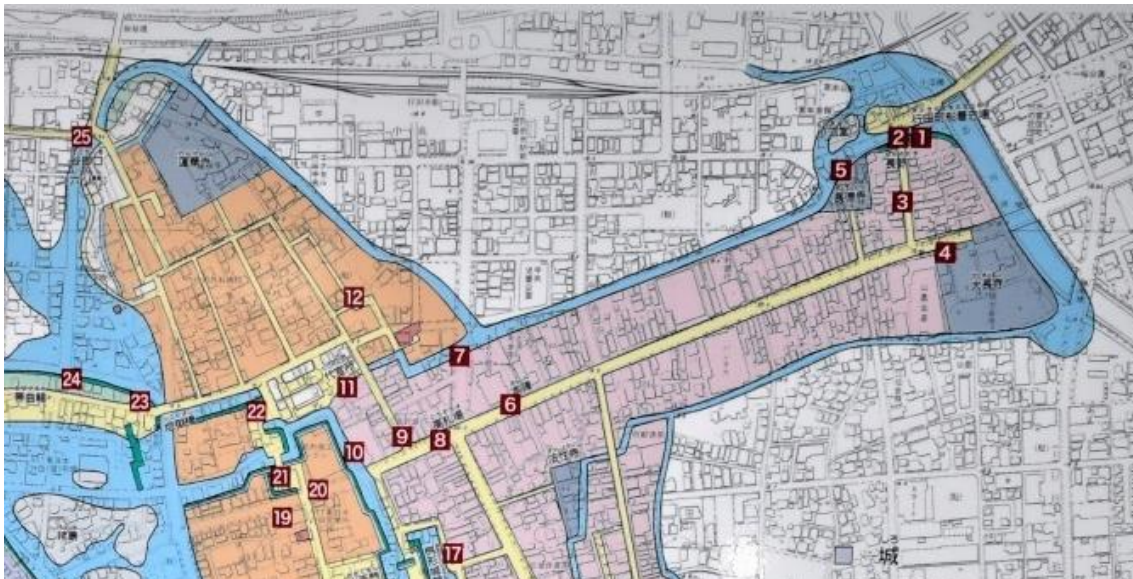
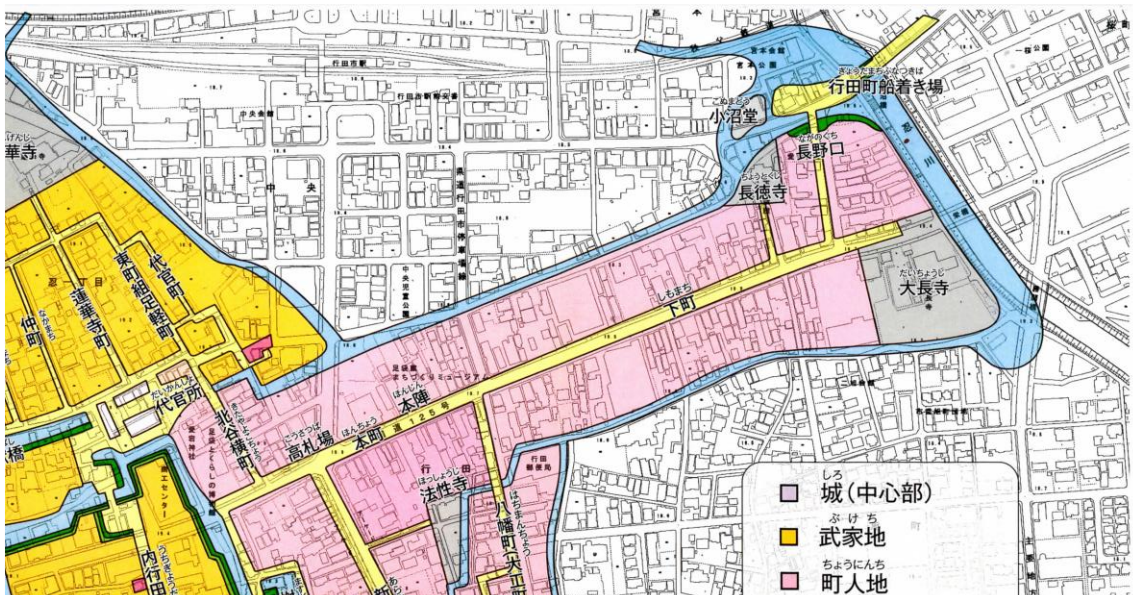


忍城長野口御門跡（裏面碑文）

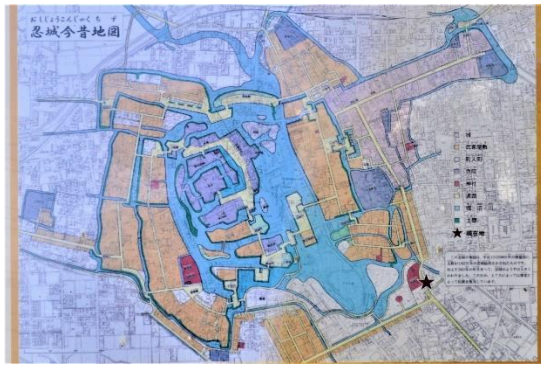
行田町の北東の固めとしての長野口御門は船着き場としての繁栄と共に重要性を増し、高札場、番所も出来、人の出入りに賑わった。

御門の北は小沼堂ともう一つの島で一帯は大きな沼であり、菖蒲の名所であった。

昭和五十四年三月



- 1 行田町 船着き場跡。 2 忍城十五門の内長野口御門跡。 3 行田馬車鉄道発着場跡。
 4 大露仏跡。 5 長徳寺跡。 6 御本陣跡。 8 高札場跡。 11 代官所跡



長野口（解説板より）

長野口は、忍城の城下町行田の東北隅に位置し、長野口御門が設けられて、忍城の北東の守りの拠点になっていました。

戦国時代の天正18年（1590）に石田三成らの軍勢が忍城を攻めた際に、ここで激しい攻防戦が行われたことが『成田記』、『忍城戦記』、『関八州古戦録』などに記されていますが、これらが記されたのは、合戦から100年以上も後で、その内容をそのまま史実であると考えすることはできません。

その当時、長野口のある下町（しもまち）は愛宕神社の門前町として市が立ち、忍城開城後には遠く京都の宮津からも商人が訪れていました。忍川には船着き場が設けられ、城下町行田の玄関口として人の行き来が盛んであったようです。

江戸時代の享保13年（1728）に見沼代用水が開削されると、やがて船運が盛んになり、長野口は船着き場として繁栄していきます。そして幕末には、長野口御門に番所や高札場が設けられるほどの賑わいをみせるようになりました。

しかしながら、明治維新後に長野口御門は取り壊され、船運も鉄道の発達とともに衰退し、かつての賑わいは失われてしまいました。 行田市教育委員会



小沼橋



新忍川

新忍川に架かる小沼橋を渡り、430m程進んだ右手に「横田酒造（株）」の趣ある店舗とその裏に酒蔵がある。



横田酒造（株）（HPより）

横田酒造は、文化2年（1805）創業。江戸に下った近江商人・横田庄右衛門が良い水を求めてこの地に造り酒屋を開いたのがはじまりです。『日本橋』の酒銘は、横田庄右衛門が若き頃、お江戸「日本橋」の酒問屋で修業し、独立する際、「初心忘れるべからず」との思いを込めて、自らの修行の地を酒銘にしたことに由来します。現代では地名を商標登録することは大変困難なことであることから、極めて貴重な商標といえます。（後略）

街道は直ぐの県道7号線との交差点を左折する。交差点から120～30mの左に秩父鉄道東行田駅があり、13時28分に着く。今日はここまで。13：54発の電車で熊谷へ向かう。



今日は、映画「のぼうの城」の忍城を見て回るウォークであった。

残念なのは、堀や沼地で囲まれた水城「忍城」の面影は明治以降の埋め立てにより全く無く、味気ないものになってしまったこと。

現在の地図と文政8年（1825）頃の忍城絵図とを比較して尋ね歩く一日であった。

以上